

「江戸しぐさ」の現在と未来―原田実氏著作を読んで―

書評

原田実 『江戸しぐさの正体』（星海社新書、二〇一四年）

原田実 『江戸しぐさの終焉』（星海社新書、二〇一六年）

原田実 『オカルト化する日本の教育

―江戸しぐさと親学にひそむナシヨナリズム』

（ちくま新書、二〇一八年）

樋浦郷子

「江戸しぐさ」とは、「こぶし腰浮かせ」（席を詰める動作）、「肩引き」（狭い道で人とすれ違う際に肩を引く動作）などの具体的事例であらわされる「江戸商人」の「行動哲学」として一九八〇年代に生まれ、二〇〇〇年代には算数、歴史、公民、道徳の教科書・副教材に採用されるなど支持が広がった。『江戸しぐさの正体』（二〇一四年）・『江戸し

ぐさの終焉』（二〇一六年）・『オカルト化する日本の教育―江戸しぐさと親学にひそむナシヨナリズム』（二〇一八年）からなる本連作は、その現象への批判を第一義とする。まずは三冊の内容と特徴を以下にまとめる。

著者によれば「江戸しぐさ」とは、もともと企業コンサルタントをしていた芝三光氏の創作したものを、支持者の

「江戸しぐさ」の現在と未来（樋浦）

越川禮子氏らが広めたものだという。この伝承は、芝三光氏による「老人の愚痴」だと著者は喝破する（『江戸しぐさの正体』、一一〇頁）。しかし、二〇〇〇年代には、江戸開府四〇〇年や公共広告機構によるテレビCMへの採用、東京メトロのポスター採用などがあり人口に膾炙し、越川氏が設立した「NPO法人江戸しぐさ」に日本経済新聞社の桐山勝氏が理事長として強くコミットすることなどで浸透していった。また、時の政権に近い人物がこれを支持したことや、政権与党が応援したTOSs (Teacher's Organization of Skill Sharing) の教育実践家を通じて、教科書への採用、道徳や歴史の時間に実践されるに至った。第一作たる『江戸しぐさの正体』では、「江戸しぐさ」に確認可能な根拠がないということを、丹念に詳細に追及する。そして本書刊行後、歴史や公民・算数の教科書からは実際に「江戸しぐさ」記述は姿を消した。教科書編纂の現場では、多くの人々が本書に学んだことを示している。ここでなされている批判の第一は、「江戸しぐさ」なるものが現代の創作に過ぎないにもかかわらず、歴史上存在するかのようには語られてしまったということそのものに向けられる。第二は、好事家の手中におさめられているだけでなく、教科書や実践を通じて教育現場に流通するに至った事態と、それを放置した「専門家」に向けられる。評者は、

この点を重要な問題であり「わがこと」であると思った。

続く『江戸しぐさの終焉』は、前著から一年半後に刊行された。前著の内容に加え、前著が刊行されてから、どのように教科書やマスコミから「江戸しぐさ」が批判され、あるいは撤退していったかということや、丁寧に跡付けられている。新聞や雑誌のコラムやレビュー、学術誌の書評、ラジオ番組、テレビ番組など、教科書以外にもこのかん（二〇一四年夏から二〇一六年冬まで）どのように『江戸しぐさの正体』での「江戸しぐさ」批判が受け入れられ、支持され、同時に「江戸しぐさ」が社会から撤退し始めたのか、詳細に記録される。『江戸しぐさの正体』と同様に、「江戸しぐさ」が根拠のないものであることへの批判と同時に、その拡大を無視しつづけた学術界の「専門家」たちへのいっそう痛烈な批判と警鐘の書でもある。前著刊行後、「江戸しぐさ」への支持は社会的に微弱になったことを改めて詳細な時間軸とともに知ることができ、その撤退が、驚嘆するほどの短期間のできごとであったと理解できた。

さらに、二〇一八年には『オカルト化する日本の教育―江戸しぐさと親学にひそむナショナリズム』（ちくま新書）が刊行された。「江戸しぐさ」と「親学」に疑似科学への親和性や関与する人物が共有しているという見解は、『江戸しぐさの正体』で少し述べられ、前著『江戸しぐさの終

焉』で本格的に提起されたものである。この見解を敷衍し人脈をたどりながらナシヨナリズムに迫ろうとする意欲作である。三冊目の本書でもっとも関心をひかれたのは、「江戸しぐさ」の持つ問題性を超え、「親学」の人脈を介した政党とのつながり・ネットワークを克明に浮き彫りにしたところである。

一連の著作を読んで考えさせられたこととして、次に三点述べたい。第一に、「特別な教科」となった道徳の、文部科学省編纂副教材が「まだ「江戸しぐさ」の記述を残している点についてである。二〇一六年にまずは小学校で道徳が「特別な教科」となったさい、それまでの副教材『私たちの道徳』（文部科学省）は、次のように記述を変更している。

「二百年もの長い間、平和が続いた江戸時代にいろいろな生活習慣が生み出され、これを「江戸しぐさ」と呼び、今に生きる知恵として役立てる動きがあります」（文部科学省『私たちの道徳 小学校5・6年』五八頁。傍線は評者による）。二〇一四年刊行当初は「二百年もの長い間、平和が続いた江戸時代に、江戸しぐさは生まれました」と記されていた一文である。

「江戸しぐさ」と呼び、「…動きがあります」という表現への修正は、明らかにトーンダウンであり、主語を故意

史苑（第八一卷第二号）

にあいまいにさせたものである。この背後に、二〇一四年八月の『江戸しぐさの正体』刊行直後からの修正作業があったものと想像される。官僚組織は何をするにも時間がかかる。刊行直後から作業を始めなければ、二〇一六年時点で全国の小学校高学年用の改訂版印刷配布に間に合わなかっただろう。「江戸しぐさ」にカッコを付けたこと、「動きがあります」へと微温的ながらも表現を修正したことは、わずかだが確かな前進に見える。『私たちの道徳』の編纂者たちも、著者の警鐘を到底無視しえないことをたしかに物語っているものと評者は思う。文部科学省側の迅速な修正を想像しながら、三冊目が刊行されたいま、『私たちの道徳』から完全に撤退する日も近い将来に来るのではないかと期待せずにはいられない。

第二に、新自由主義下の教育政策という土壌についてである。「江戸しぐさ」が教科書入りしてしまうという事態をまねいた土壌として、新自由主義とその下の教育政策があるのではないかと考えた。新自由主義下の教育政策は、学校制度への市場原理・競争原理の導入と同義といつてよい。具体的には、民間人校長や副校長制の導入、学区制の弾力化・廃止、校長や学長の権限強化、学校法人の設立主体の多様化（NPOや民間会社立学校の登場）、インターシップや「職業観」の育成・キャリア教育の重視…など、

この四半世紀ほどのあいだに学校教育現場を大きく変容させてきた多くの制度改定を支える理論である。

新自由主義では、国際間競争が推奨されるため、グローバル化が必然的に進行する。その結果、外国人労働者の国境をまたぐ往来や価格競争は激化し、比例して排他的・排外主義的態度も増加しうる。グローバル経済のもとで、従来型の「私たち」の一体感・アイデンティティが動揺させられるため、それをもう一度引き締めようとするとき、少数派を犠牲にして攻撃し「私たち」の一体感を守ろうとする。サッチャー政権以来の英国、レーガン政権以来の米国、小泉（または中曽根）政権以来の日本でも、そうした流れは明らかである。

このような時代の動きのなかで、「私たち」の一体感が失われるのではないかという不安は増長する。そのため「私たちとは誰か」を探し出して、安心を求めたくなる。そこに、「江戸時代」「江戸のまち」の伝統のイメージ（あくまでイメージ）を共通して想像できるのが「私たち」だと考えてみることは、不安を持つひとびとにとって安心を与える回路の一つになりえたのではなかったらうか。

誰がそのような不安にさいなまれた／さいなまれているのか。グローバル経済のしわ寄せをもっとも早く切実に感じた人々は、経済基盤の弱い中小の商工業、農林水産業で

自営する人々ではないだろうか。地域社会の農協や商工会議所の「青年部」に属するであろう自営業層のなかでも相対的に若い人々が、明日生きていけるか、という不安に真っ先に襲われるのではないか。

学校へと「江戸しぐさ」が入り込んだ背景には、「聖域なき構造改革」にともない大量に学校に出入りようになった（さらにいえば、管理職や教育委員会委員として出入りするようになった）「民間人」たちがいたのではないか。同時に、こうした不安にもっとも鈍感でいることができたのが、とくに二〇〇年代までの公務員や学者たちであろう。「専門家」が「江戸しぐさ」を無視したのは、不安の風への鈍感さと一繋がりのこととさえないか。

第三に、教育に名を借りて理不尽を押し付ける行為の命脈をつないで来た存在としての「社会（人）教育」についてである。「江戸しぐさ」を企業コンサルタント業の人々が唱道し流通させてきたことが、一連の問題を考える一つの重要なカギになる。本連作で唱道者や支持者の来歴が明らかにされたことをきっかけに、評者はもっとも考えさせられた。

企業の内外で実施される社員研修は、ほかならぬ「社会（人）教育」のもっともリアルな現場である。社員研修について呼称を確認しておく、現代の社員教育（社内研修・

社外研修)は多くの場合、「研修」と呼ばれる。研究と修養に由来する言葉である。このうち、精神を磨くという意味での修養の部分には、戦前から修養論ブームの歴史を持っている。しかし企業の研修で有名な接遇は、「特定非常利法人接遇教育協会」「一般社団法人接遇教育推進機構」(傍線は評者による)のように「教育」の二文字が入っている、企業の研修担当は教育担当と呼ばれたりもしている。学校外で行われる、教育に類する行為をどう呼ぶかということ事に、宏大なグレイゾーンが伏在していることを意味する。

現代、実際の社員研修では接遇「教育」のほかに、滝行や、寺での修行、富士登山、素手のトイレ掃除、駅頭で大声を出させることなどを、複数の企業がおこなっている。そうした研修を、外部の研修専門企業に委託する事例もよく耳にする。社員研修では、団結心や達成感など情動の発揚を目指す、学術の根拠や理論が弱い、非合理性に対して肯定的であるなどの特性が共通している。

学校教育では、カリキュラムのリジッドさが比較的脆弱な、総合学習・部活動・学校行事などには、非(疑似)科学的なものに肯定的、あるいは合理性を問わない思考が入りこむ余地が残っている。例えば素手のトイレ掃除は、企業の社員研修だけでなく学校行事としても実施している

ころが複数あるようだ。「江戸しぐさ」の記述は算数や歴史の教科書からは速やかな削除が行われたけれども、道徳に残存しているのはそうした文脈でのことであろうと評者は考えている。

ただし学校教育においては最低限ブレーキが作用する仕組みがあり、カリキュラムや制度が厳格な場面では、それがまだ機能している。学校教育法に定める体罰や宗教教育・政治教育の禁止がその例である。とくに公立学校では、かりに宗教行為に類することを行えば、ときには裁判でその違法性が争われ、判例となり引き継がれる。

これに対し社員研修においては、体罰の禁止や教育と宗教の分離など、学校教育ではほぼ「当たり前」のことが考慮されない。それは宗教法人の寺社がホームページに「社員研修のご案内」を掲出していることに象徴される。社員と雇用主の関係のなかでは、学校教育に働くブレーキが存在しないために、こうしたことがいっそう日常的に起こると考えられる。かかる点で、現代社会の社員研修は、学校教育より非科学に親和的になる余地があるといえる。

なぜこうした状況が現出しているのかを考えるとき、戦前の教育制度の中で、青年学校の歴史が参照軸になる。戦前の一時期存在した青年学校は、「私人」でも設置が可能だった(一九三五年青年学校令第四条)。この点では、現

「江戸しぐさ」の現在と未来（樋浦）

代の学校設置主体の弾力化（株式会社による学校経営など）を九〇年近く先取りしていたといえる。義務教育だった尋常小学校や高等小学校を卒業して丁稚奉公から働きたした／あるいは特に職業につかなかった若者たちを収容しようとした青年教育は、一九三五（昭和一〇）年に青年学校令という形で結実した。

一九三九（昭和一四）年、戦時下の総動員体制と時を同じくして男子だけ義務化された青年学校は、教科よりも精神修養や軍事訓練・実用の働きが重視された。受験が必須の中学校や高等女学校よりも設置が容易で、企業や工場内に附属青年学校が作られることも多かった。中等教育機関を受験することのない、多くの「勤労青年」には「誓いの言葉」の暗誦やみそぎ行など、現代の社員研修にも通じているかのような行的実践が待っていた。そして二〇歳になると徴兵され、配属された各聯隊でいっそう苛烈な非合理体験を積み重ねてきた。

敗戦を機に軍隊はなくなり、青年学校は解体され、こうした非合理主義の肯定は学校教育からは、とくに教科教育の大部分からは追いつけられなくなった。しかし戦後は企業研修のなかで命脈を保ち、息を吹き返し、ふたたび新自由主義の不安の空気をまといつつ学校教育のなかへと、ぐるりと時代を一巡りしてもどってきた。戦前の修身科のように、教科

になることを目指していた道徳（現在は「特別な教科」化された）とともに。

著者は、学校教育における「江戸しぐさ」の導入を深く憂慮し鋭く批判する。評者は、それを正しいと思っている。他方で、企業の社員研修の領域では青年学校や軍隊さながらに、非合理が肯定され実践を要求され続けていることも、ひとしく深刻な問題だと感ずる。教科書／学校でなければ、疑似科学を広めて良い道理はない。研修という名の非合理の押し付けには、葛藤を抱いたり、苦しんだり、就業意欲を阻喪する社員もいることだろう。

非合理からは縁遠い世界にいるかのような学者たちに考えてほしいのは、苦勞して正規の職を得て社員研修に送り出される若い社員たちの多くが、大学進学率の高まった現代、大切な卒業生であるということだ。教科教育の教科書からは姿を消しても、より広い「社会（人）教育」の現場で非合理の命脈は生き延びている。「江戸しぐさ」の未来を、なお凝視し続けねばならない理由はその点にあるのではないか。学校教育からの「江戸しぐさ」の消失が間近にもみえる二〇二一年、本連作の警鐘は依然重要である。

（国立歴史民俗博物館准教授）